

## 新しい靴

The New Shoes by Johnson



キティ・ホリスターは靴箱を見てため息をついた。週末、彼女は友人たちと新しくできたバーに遊びに行く予定だった。そのために、新品の靴がどうしても欲しかったのだ。

キティはしばらくベッドに腰掛け、現在の自分が置かれた状況を熟考した。だが、どう考えても、ハイヒールを新調するだけのお金は捻出できそうにない。

彼女の脳裏に、起死回生の妙案が浮かんだ。

彼女は立ち上がり、衣装箆筒をごそごそとかき回しはじめた。白いコットン・パンティ。それから黒のタイトな超ミニスカートを取り出した。

三十五歳にもなって、こんな大胆なミニが似合うかしら。

不安になった彼女は、ミニスカートをはいて鏡に向かって立った。

うーん……。

彼女はしばし沈黙考し、それからぐるりと一回転した。

……悪くない。

彼女は白のブラウスを着、わざとボタンの上のほうは止めずにはだけ、自慢の大きな胸が覗けるようにした。

十分ほどかけてメイクアップをすませ、それから靴箱からなるべく恰好のいいハイヒールのパンプスを取り出した。

ショッピングモールに着いた。キティは車を駐車場に停車させた。

車から下りたとき、彼女は愛車のすっかり汚れて傷だらけのボディを眺めてまとも溜め息をついた。

新車も欲しいな……。

彼女は首を振り、お目当ての靴屋に向かって歩きだした。

その靴屋はフロアが広く、品ぞろえが豊富だった。

以前、この店に立ち寄った経験から、店員はすべて男性であると知っていた。今日の彼女の目的達成には好都合だった。

彼女は店内に入った。二十代の店員が近寄り、いらっしやいませ、と頭を下げた。

店内を見回した。水曜日の朝とあって客は少ない。店長はレジのそばのデスクに座って書類に没頭している。

「靴がほしいんだけど」

キティが言った。

「なんていうのかな……パーティ用のセクシーなのがいいわ」

彼女は婉然と微笑んだ。店員は、「ではこちらへどうぞ」と手で奥のほうを指し示し、歩きだした。

しめしめ、とキティはほくそ笑んだ。その場所は、棚に遮られ、店長や他の店員や客たちからは見えない死角になっていた。

キティは椅子に座って足を組み、店員は彼女に向かって立った。

「サンダルでしょうか？ それともパンプス？ どちらも、よい品を揃えております」

「サンダルがいいな」

キティは彼を見つめた。

「くるぶしや指先が見えたほうが、セクシーじゃない？」

少し身をくねらせて、喉を鳴らすような声を出した。店員は心の揺れを押し隠すように微笑んだ。

「サイズは？」

「四号をお願いします」

「かしこまりました」

やがて店員が箱を抱えて戻ってきた。彼は、キティの足元にそのサンダルを並べた。黒のスト

ラップつきで、ヒールは4インチ。

「これを試してみてもいいかがですか？」

店員が言った。

「そうね。なかなかいいんじゃない？」

キティは答えた。

「ご自分でおはきになられますか？」

店員が訊ねた。キティは意味ありげに微笑んだ。店員は微笑み返し、「では、ちよつと失礼して」と屈み込んだ。

しめた、とキティは内心思った。これで、この靴は私のもの。

店員は彼女の正面に膝をつき、靴を脱がせはじめた。彼がちらちらと、彼女のスカートの内部に視線を走らせているのがよく見えた。キティは彼のために、内部がよく見えるよう姿勢を変えた。

靴を脱がせ終わると、彼は新しい靴の片方を手に取った。

「もう少し、足を上げていただいてよろしいでしょうか」

店員が言った。キティは足をあげた。その拍子に、パンティやガーターベルトが店員の視線に飛び込んだ。

彼はそつとサンダルをはかせ、ストラップをくるぶしに巻き付けて、ボタンをとめた。そして、

もう一足を同じようにはかせはじめた。

キティは素早く店内に眼を走らせた。まだ空いているようだ。他の客からは完全に死角になっている。

それから、店員の股間を見やった。ズボンの、その部分がかもつこりと盛り上がっていた。

あの盛り上がった部分の下のほうに、ターゲットがあるはずだ。

彼女は注意深くその位置を確かめた。店員は、キティのスカートの奥と、長く延びた脚だけに心を奪われていた。

店員がストラップのボタンを留め、顔をあげた。

次の瞬間、キティは思い切り両足で彼の睾丸を蹴りつけた。

尖ったサンダルの先端が、彼の左右の睾丸に食い込んだ。弾力のある睾丸が一瞬ひしゃげ、それから元に戻り、彼女の爪先を押し返すのが感じられた。

店員は甲高い悲鳴をあげた。

キティは素早く立ち上がり、叫びはじめた。

「この変態！ よくもスカートを覗いたわね！」

店員はうずくまってきたまま、じつと苦痛を堪え、激しく痙攣している。

「変態！ 死んじまえ！」

「お客様！」

店長が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「なにか、ございましたか？」

店員がとうとう、横倒しに倒れ、苦痛に呻きながら悶絶した。

「こいつ、私のスカートを覗いたのよ！　すぐにクビにして！」

キティは金切り声を張り上げた。

「こんな店、もう来ない！」

彼女は、呆然とする店長にそう宣言し、くるりと踵を返して大股に店を出た。

彼女の手には古いパンプスが握られていた。そしてもちろん、新品のサンダルは彼女の足にしつかりとはめ込まれていた。

車に乗り込み、エンジンを掛けながら、ふとキティは声に出して呟いた。

「この調子で、着ていく洋服も買えそうね……、それに車も」

アクセルを踏みながら、男性店員しかないブティックであったかな、とキティは記憶をまさぐっていた。